

廣津柳浪『今戸心中』『浅瀬の波』試論

——金銭・時間・語りをめぐって——

岡 田 豊

1

『今戸心中』（明治二十九年七月）と『浅瀬の波』（明治二十九年十一月）の発表から遡ること約二年前の明治二十七年という年は、鉄道史上、次の二つの点で画期的な年であった。一つは日本で初めて時刻表が月刊化され、広く市販されたという点であり、いま一つは日本最初の急行列車が山陽鉄道の神戸〜広島間で誕生したという点である。^(注1)時刻表月刊化にもなつて、より多くの人たちに最新の鉄道発着時間の情報が簡単に手に入るようになり、時間を軸にした行動の日常化が促進されていったと推測することは十分に可能であろう。もちろん山陽鉄道線での日本初の急行列車誕生という歴史上の事実をもつて、『今戸心中』の平田が実家の岡山に帰る際に急行に乗った可能性を訴えたいわけではないが、^(注2)「もう何時になるんかね」「え、五時過ぎ、遅くなつた、遅くなつた」（五）という平田の言葉ひとつ

をとってみても、鉄道を使って移動する男が時間を気にしている姿を想像し、列車発車時間もたらした時間観念の影響を見ることにさほど無理はないだろう。というのは、この鉄道史上の事実と虚構の文学テキストの交流が、後に述べる「金銭と時間」という角度から二作品へ迫っていく方向を教えてくれているからである。しかも、発表時期の近接している二作品に、語り手が逐一時刻を語っていく文体上の特徴がある点を考慮に入れると、いっそう看過できない貴重な示唆を与えてくれていると思われるのではないのである。^(注3)

改めて考えてみると、鉄道はそれを使って移動する人間がみずからの行動を時間で区切り、行動の予告を可能にしていた。日本最初の月刊時刻表である庚寅新誌社刊『汽車汽船旅行案内』は、多くの人間たちに時間を軸にした行動を促していく原動力たりえた。榎並重行・三橋俊明両氏が指摘するように、鉄道は知覚の土台をも「時間と距離の算術上の相関」へと変換させていったわけである。^(注4)だが、〈時間の商品化〉という点も見逃してはならないだろう。時刻表が正確な時間を商品として普及させる事態を加速させたとは、金銭的価値体系との結合を意味している。もちろんそれは鉄道利用者のレベルにとどまらない。時間を基軸にした行動は、鉄道の運行に従事する賃金労働者にまで及ぶ。〈時刻表〉という形で発着時間を公表し、時間の正確さを商品化していくためには、必然的にその時間に間に合うように作業の進行を時間刻みでスケジュール化し、そのタイムテーブルの厳格な拘束のもとに作業を行わねばならないからである。賃金労働者が時間に管理され、その代価として賃金を得るといふ労働のスタイルは、まさに鉄道が象徴していたといえる。

明治二十年代後半にこのような「金銭と時間の論理」が浸透し始める状況を、かなり散漫ではあるが、鉄道と時刻表を参考にして取り上げてみた。この時代のコンテキストが、『今戸心中』が内包する表現の奥行きを照らし出してく

れるとともに、従来さほど顧みられなかった作品といえる『浅瀬の波』を読み解くためにも不可欠であるという認識が本論の出発点になっている。さらに欲をいえば、そのような視点から把握できる表現の構造が、漠然としている廣津柳浪の問題意識の一端を捉えるための有効な参考軸になるとも考えられる。時間観念の浸透は何も作中の人物たちの生きる時間のレベルだけではない。先に述べた語りの特徴にまで視野を広げると、語り手の物語る行為を大きく左右する時間感覚と呼ぶべきレベルにまで影響を及ぼしていると考えられる。物語が進行していくその運動との関わりを考察することもまた課題である。『今戸心中』も『浅瀬の波』も実話、ないしは見聞したことが執筆動機になっているのは周知の通りであるが、^(注5) 本稿はまず同時代状況を検討材料としながら、虚構のテキストの〈読み〉を通して、若干の考察を試みようとするものである。

2

なぜ吉里は嫌悪していた客と心中したのか——『今戸心中』の最大の謎はこうまとめることができる。このことへの疑問はすでに提出されてきた。読者を刺激し続ける作品の持つ魅力だと言えようが、その魅力を形成する成分として、近松的ではない心中の表現世界が描かれている点が指摘されている。^(注6) それら貴重な見解を見据えながらも、ではこの〈空白〉そのものを読者は〈読み〉によってどう埋めていくことができるのかという点でまだ多くの可能性を包含するテキストだと思われる。その点で注目しておきたいのは、「平田が別れに残しておいた十円のコ」を使い、さらに花魁たちから借金してまで約一カ月間善吉を「登楼」^{あが}らせたのはなぜかということである。十円の受領と消費につ

いて細かく読み直して見る必要があるのだが、この十円の消費が薄情な平田を憎んで使い果たす行為でもなければ、善吉を一ヶ月近く「登楼」^{あが}らせたのが手練手管で迷わせる行為でもないことに注意を払っておかねばならない。そして、この行為が吉里の不可解な心理を想像させる契機となっており、空白を発生させているという点でも、こだわってみるだけの価値がありそうなのである。

支払いを引き受ける九章を念のため確認しておきたい。まず善吉はこう言う。「平田さんとか云ふ人を送出しに出での時も、私しや覗いて居たんだ」。それを聞き、平田との別れに悲しんでいた時に、家を手放す事態の最中、来てくれていたという認識が吉里に生まれる。平田との時間と重なり合うようにしてもう一つの時間が吉里の内面に生じる。この善吉の言葉の直後に、「平田と善吉の事が別々に考へられたり、混和ツて考えられる」という語り手の説明があるが、これは平田との時間と別にあつたもう一つの時間を想像する力が吉里の内面に生じた様子を表現するものである。この直後に勘定を引き受ける行為を選択していることから、無駄な時間を過ごさせたことへのすまない気持ちが生じているのはたしかである。一方、平田は吉里にとって営業上の客以上の存在だったのだから、その男から手渡される十円は、商品に対して支払われるような違和感や、手切れ金のような意味あいを抱かせたに違いない。十円がたとえ平田の配慮であっても、それを受け取ることは吉里の望むところではなかったはずである。以上の文脈から十円の流れはこう考えることができる。つらくあたって無駄に過ごさせた代償に善吉との時間を過ごし、平田の十円を客としての善吉からの支払い金として利用する。それは平田の商品となる事態や手切れ金の受領を回避する行為でもある。この吉里の発想は金銭の意味内容の転換と呼んでよい。この金銭価値の転換が死への一步となって、ついに借金を抱えた善吉と同じ立場に立たされたことになるのだから、吉里を心中へと追いつめる事態は、平田と入れ替わり

に、善吉が吉里の部屋に入った六章の時点で始まっていたことになる。だから、吉里の絶望と善吉の絶望という二人の関わりの方にアクセントをおいて結末の心中を読むのではなく、あくまでも〈平田・善吉・吉里〉の三者の関係式として読み解く必要があるように思う。そこで、善吉が部屋に入った六章の場面を考えてみたい。

『早くお臥みなさいまし。お寒う御在ますよ。』と、吉里の室に入ッて来たお熊は、次の間に立ッた儘上の間へ進み難くさうに見えた善吉へ云つた。

上の間の唐紙は明放しにして、半押除けられた屏風の中には、吉里が彼方を向いて寝て居るのが見える、風を引きはせぬかと気遣はれる程意気地のない布団の被け様をして。

行燈は既に消えて、窓の障子はほのくくと明るくなッて居る。千住の製絨所か鐘が淵紡績会社かの汽笛が遥かに聞えて、上野の明六時の鐘も撞ち始めた。(傍点引用者、以下同じ)

これまであまり注目されてこなかった場面であるが、千住製絨所か鐘淵紡績会社かの始業を告げる汽笛と上野寛永寺の「明六時」を告げる鐘がコントラストをなしている点に着目したい。なぜなら、金銭の価値轉換の発想と密接な関わりを持っていくうちに、「遥かに」聞こえる六時労働開始の汽笛が吉里の部屋で聞こえる事情が、わざわざ語られていることに少なからぬ意味があると思われるからである。時間を気にしながら去った「情夫」と入れ替わりに入ってきた男の「流連」開始の時と、工場の始業時間を告げる汽笛、そして寛永寺の明け六つの鐘を重ね合わせて語られた「六時」とは、心中へ突き進む時間を刻み始める時刻であるという意味においても注意を要する場面といえる。(注7)

横山源之助は『日本の下層社会』（明治三十二年四月）の中で、紡績工場の昼間部の始業が通例「六時」であり、平均労働時間が十二時間と報告している。鐘淵紡績会社では、職工たちの出勤状況の把握に頭を抱えていたらしく、「通帳」を作って出勤時間の厳格な管理を行っていたようである。^(注8)決められた時間に作業を開始し、休憩をはさんできっちり終業まで働かせる。いわば時計に従った労働のリズムを徹底的にたたき込む工場側の体制をうかがい知ることができる。^(注9)また、給与面では金銭と時間の論理がくっきりと現れている。千住製絨所、鐘淵紡績会社ともに、労働者達を年齢、能力に応じて等級に振り分け、その等級が給与を決定していくシステムを採用している。技術や「製品の多寡と個数」といった製作高で能力を図り、給与査定に反映させていくわけである。^(注10)岡本幸雄氏の調査によれば紡績工場の多くが採用していたというこの「等級別賃金体系」^(注11)は、一定の時間内に製品を多く仕上げる能力や技術を金銭に換算し、それによって労働意欲を刺激し、職工たちを整然とした序列の中に組み込んで管理する金銭と時間の論理を体現するシステムであったといえる。このように、出勤時間を管理し、時間内に能率良く働くリズムを労働者にたたき込んでいく記号性を始業開始の汽笛から引き出すことができるのである。^(注12)

ならば、出勤時間の管理及び「等級別賃金体系」の導入といった金銭と時間の論理による管理のもとに置かれた職工たちの立場を小説の世界につなぎ合わせていくと、吉里の「来年の四月迄は居なければならぬか」という嘆きの言葉と共鳴しあうのに思い当たろう。「来年の四月迄」とは、とりもなおさず借金返済完了まで拘束される労働時間だからである。「角海老の大時計の十二時」からはじまって、テキストを流れる時間は吉原の労働時間であるという面も持っている。工場の労働開始の時間が遊女の部屋で鳴り響き、結びつけられる意味がここにある。

では商人善吉の時間とはどのようなものであったのか。今村仁司氏は、時計が告げる計算された人工的な時間を、

商人が利潤を生むために利用するところに近代的時間観念の誕生を見ている。さらにその時計が初期マニユファクチャーの労働リズムの正確な計算にも適当だったと述べ、朝、昼、晩という自然のリズムを表現する教会の鐘に対置させて、都市に勃発した時計が商業の時間を体现するという構図を見ている。^(注13)商人の時間とは先を見通し、利潤の追及を目指す人間の生きる時間であり、労働の時間でもある。善吉はそこから外れたことになる。しかし、商人の時間とは利潤追求と損害回避のための計算可能な時間であった。語り手は善吉について「死に金ばかりは使はず、きれる所にはきれもするので、新造や店の者には何時も笑顔で迎へられていたのであつた」(六)と説明する。その無駄な投資をしないはずの善吉が、冷遇されてまでやって来て、気前よく金銭をばらまく姿は何を意味するのか。それは支払う金銭が吉里を手に入れるための先行投資であつて無駄金ではないとする商人的発想である。損をしないはずのその男が店を畳む羽目になったのは計算を誤つたからにはかならないが、この誤算がお熊を始めとする店の者たちが、金銭を用意すれば〈吉里との時間〉が購入できるといふ幻想を植え付けたからにはかなならず、善吉もその幻想にのつてしまったからである。吉原も金銭と時間の論理が充満した場所である。内所側の経営論理はもとより、従業員も客を引きつけておく手腕を問われる立場にある。善吉の計算はそういう状況下で狂わされていったわけである。

吉原の金銭と時間の論理は善吉を商人の時間から締め出すところまで追いつめ、揚げ代が払えないという理由で切り捨てる残酷な論理である。店がつぶれた事実を聞かされた後、無駄に過ごさせた代償に勘定を引き受ける吉里の行為は、吉里の気持ちの上では金銭と時間の論理抜きのもてなしを意味する。しかし、揚げ代をあくまでも立て替えているのだから、完全に吉原の金銭と時間の論理から逃れ得たのではけつしてない。善吉の別れの言葉に同情し、ついに借金を抱えた善吉と同じ立場に立たされ、逆に吉里は吉原の金銭と時間の論理の残酷さを実感するわけであるが、

十章で吉里が十日ほど店に出ていないという言説の持つ意味合いを見過ごしてはならない。なぜなら、店に出ないこと自体が吉原の金銭と時間の論理への反抗の姿勢を意味するからである。その文脈において、お熊の「善吉を呼ばないようにして」云々という吉原の金銭と時間の論理を実践する従業員らしい忠告が挿入され、吉里の発する「もう可厭な事ツた。」という言葉が続くが、ここから吉原の金銭と時間の論理への対抗を読みとることが可能である。たしかに平田は鉄道利用が象徴するように、時間計測による行動を体現していく存在としてある。しかし、吉里の側から捉えるならば、「情夫」との特別な過去の時間を金銭的価値に換算したくないという心情を読み取っておかなければならない。なぜなら、平田の十円が価値転換されたのが、平田と過ごした時間を吉原の論理に埋没させないためだったからである。こういった手続きを経て、吉里が「流連^{いっせ}」を承諾し、「三日にあげず」「登楼」らせる執拗さの根源には、吉原の金銭と時間の論理に反抗する力が潜んでいると読み取ることができるのである。

むろん内所が多大な打撃を受けない以上、結果的に自己を追いつめることでしかない。その敗北のけじめが、すなわち心中という死の選択であったと読むことができる。ゆるやかな寛永寺の鐘、金銭と時間の論理が充満した工場の汽笛、商人の時間からはずれた善吉、これらが吉原の遊女の部屋で結びついているという設定は、二人の心中の物語を読み解く鍵であった。善吉が吉里の部屋に入るときに響くもう一つの時の鐘の音が、自然的な寛永寺の鐘だったのを想起しておく必要がある。死が自然への回帰だとするなら、善吉との死は近代的金銭と時間の論理の苦痛を共有した友とけじめをつける儀式であり、同時に近代的な時間との決別を意味する。何よりも平田との時間を守り通した形での死は、善吉との擬似的な男女関係の解消の表徴でもある。遺体が一緒に発見されるのを避けて物語が結ばれた意味もそこにある。近松的ではない心中の言説が抽出できるならば、近代的な〈金銭と時間の論理〉への反抗を描く物

語という角度からそれをとらえ直すことができると思われるのである。

3

さて『今戸心中』の約四ヶ月後に発表された『浅瀬の波』も金銭と時間をテーマに据えた小説として捉えることができる。この小説は、決められた時間に金銭を用意しなければならぬヒロインが登場する。筋立ての陳腐さが理由でこれまであまり評価されていない小説である。しかし、視点をずらして、金銭・時間、そして語りの構造に光を当てることによって新たな相貌をみせる小説として再評価できると思われる。本稿冒頭で少し触れたように、語り手が時刻を盛り込んでいく特色を持つ点で『今戸心中』との共通性があるが、語りの構造がはっきりしているため、かなりの達成度を感じさせる。よって、金銭と時間の論理が語りの問題とどういった接点で結ばれるのかをここでの主たる考察の対象にしたい。

語り手は次の二つの場面を共時的に語り出す。一つが五円をせびる三吉と用立てようとするお勝の二人がもめている場面であり、もう一つが三吉のためとは知らず五円を用意した弁三がお勝を待っている場面である。こうして、五円を軸に物語が切り出され、お勝を媒介に五円が流通していく経路が提示される。新甲子楼の時計塔が告げる一時三十分にいったん別れたお勝と三吉が再会したときに悲劇が起る。

萬字楼の新造お勝はかつて客の財布に手を掛けたところを、同じ楼の書記の弁三に見つかり、それ以来腐れ縁が続いている。

『お前が忘れたと云やア、又更めて云つて聞かせて遣らうさ。さうだ、去年の暮の廿七日の朝の事だ。高円さんの初会のお客の帰後に、お前が居やうたア知らねえから、ふいと乃公が入つて行くと、お前が周章て帯の間に挿んだなア、袱紗包の紙入だから、乃公も突ア吃驚して……』(四)

まずこの箇所から掘り起こしたいのは弁三の商人的発想である。「去年の暮の廿七日」にみる日付の正確な記憶は何を意味するのか。それは金銭と時間の論理に立った商人的発想の現れである。なぜなら何度もお勝の要求に応えて金を支払う態度は、お勝の未来までを買い取り、所帯を持つための投資であつて無駄ではないとする計算と未来の先取りの体現だからである。結婚話を持ち出す八章においてその現れをもっとはっきりした形で見ることができる。当初は「世事や愛想は抜きにし」「否なら否だと云ふが可いや」とお勝の気持ちを尊重する態度を示したが、返事をしないお勝に業を煮やして怒鳴り始める。「(略)乃公の口が一つ滑りや、お前はさうしちやア居られめえぜ。其を乃公は誰にも云はねえ、其上お前の為には随分相応に力に為つた積だ。今夜の五両の金だつても、お前の返事次第ぢやア、今此処でだつて渡して遣らア」(八)。この発言はお勝の過去から未来までを買い取り、自分の手中にあることをほめめかす言葉であり、商人の金銭と時間の意識をあらわにするものである。

一方の三吉はどうか。東雲をかう資金はお勝が弁三経由で手に入れた金である。その金の出所をいっさい気にとめず、東雲という遊女を「逃亡」させてお勝と所帯を持つための資金を手に入れる計画を進める。「遅くとも二時迄にやア、如何したつて入用んだせ」(一)や、「三時半頃にやア三公が引張り出す筈だから」(六)など枚挙にいとまがない

が、三吉も商人的な金銭と時間の論理の体现者たる要素を多分に備えているのは間違いない。所帯を持つのに十分な金に膨らませるためには、時間を計算して手はずを整え、仲間への分け前を差し引いても十分な資金が残るように、である。首尾よく事が運ぶよう時間を計算する発想は未来を先取りし、金銭でお勝の未来を買うことを意味する。この商人的な二人の男の間で、その金銭と時間の論理の板挟みになるのがお勝である。常に「客の紙入れに手を付けた」過去を気にしながら、約束の時間までに五円を用立てる苦勞を余儀なくされ、金銭と時間の論理の犠牲になるしかない姿が浮き彫りにされる。登場人物が抱く〈金銭と時間の論理〉を炙りだすと以上のような構図になるのだが、お勝を詳細に読んでいく上で欠かせない問題に語り手の時間の取り込み方とその変容がある。

「十二時」の拍子木の音が鳴り響いた時に物語は幕を開ける。一章は「もう十二時余程過ぎた」（三吉の言葉）頃までお勝と三吉とのやりとりを中心に描かれる。この場面の裏側が今度は表となって描かれる二章は、「新甲子の時計の一時」に弁三がお勝を待ちわびている場面で始まる。この時に弁三は〈お勝・三吉・東雲〉の三角関係と、金を貢がされていた事実との二つの情報を八五郎と熊吉から偶然手に入れる。この場面の裏にあたる三吉とお勝の場面がまた表となる三章は「一時半過」の出来事が語られる。四章ではお勝が弁三と合い、彼の口から〈三吉・東雲〉の関係についての情報を聞かされる。四章になると、「甲子樓の時計が二時」を告げ、三吉が〈お勝・弁三〉の関係についての情報を手に入れる。三吉への情報提供者は同じく八五郎と熊吉である。〈三吉・東雲〉情報が入っても、依然としてお勝は三吉のために弁三の財布を盗む点と、二時を境にお勝が急に時間を気にし始める姿とは、彼女を捉える上では非とも注目しておきたい事柄である。そして、語り手が時刻表示をしなくなり、お勝にその役割を委ねる語り口の変容もこのことと微妙に関わっている。具体的には、お勝の内面描写に「三時迄の約束の今は二時過ぎ」（六）とあり、

お勝が弁三に話しかける会話箇所にも「彼此三時になるぢやアないかね」(六)とある。弁三との仲を疑う三吉は計画どころではなくなり二人を探し回るが、その途中に計画実行メンバーのひとり兼八に出会う。その時、兼八に「もう三時ぢやアねえか」と言われ、三吉は「何でもねえ」と答えて探しに行ってしまう。それに対して、計画の内実を知らないままお勝の方は、三吉のために計画実行者の兼八と同じように約束の時間に間に合わせようと努めている側面は好対照をなしている。すなわち、テキストを流れる時間の直線運動はお勝の金銭と時間の論理に歩調をあわせるかのように突き進んでいることになり、語り手は二人の商人的な男の間で宙づりになったお勝にレンズのピントを合わせて語る意図性があったことになる。それは語り手が時刻表示をしなくなる代わりに、お勝にまかせるところからもうなづけるのではないだろうか。語り手がそれだけお勝に寄り添っていたといってもよい。

突き進む時間は『今戸心中』で見たようなコントラストをなしていないし、吉里が試みた金銭と時間の論理への反抗の身ぶりとは異質である。『浅瀬の波』は何も知らずに約束の時刻に間に合わせようとするお勝に寄り添い、前へ前へ進む時間の表示は金銭と時間の論理を振りかざす男の言いなりにならざるを得なかったお勝を語る言説形成の一助となっている。柳浪自身は「妓夫や遊人などが来てゐて、互に話すのを聞いてると、己の馴染の女を何処へヤツて奈何するの、斯うするのと全まるで品物か何かをあつかふやうに話してゐたのを聞いて、彼の作は思ひ附(注14)いた」と述べている。この作家側の言葉をそのまま作品の読みに直接結びつけるべきではないが、金銭と時間をめぐって商品のように扱う男と、扱われその論理に飲み込まれてしまった女を語り手が明確に描写する特質を裏付けるものではあろう。だとすれば、〈作家〉の次元から二作品を位置づけ直すと、柳浪が相反する二つのヒロインをほぼ同時期に提示していたことになると思うのである。

さて、『浅瀬の波』は語り手の語る姿勢という文体上の問題にまで金銭と時間の論理が関わっていた。『今戸心中』ではどうだろうか。再びこのテキストを語り手の観点から考察してみたい。

『今戸心中』は読者の意識を語り終えた過去の場面へと誘う力を感じさせるテキストである。それは平田と過ごした過去へと逆行するヒロイン吉里の内面が読者の印象に残るからだと言えるが、読者を過去へと向かわせる牽引力を、語り手が吉里とどう接しているかから見ていくために八章の内面描写を検討する。この内面描写は吉里の生の声というより、語り手が介入して一定の加工がほどこされているが、語り手はこれまであかさなかつた吉里の内面を次のような準備をしたうえで語り出していく。「これがお別れなんだ。今日限りもうお前さんと酒を飲むことも無いんだから」という善吉の別れの言葉を肉声で伝え、それが吉里の感性を刺激する様を描き出していき、ついには語り手の声と吉里の声とが交互に現れながら、やがて内面世界が提示される。善吉が口にする別れの言葉と吉里がどう関わるかを読ませるためにこの内面描写が存在していたといえる。つまり、過去の出来事を基盤にして別れの言葉を発する善吉の心の内を吉里が解釈していく過程を描き出すよう語り手が調節している点に注意を払っておく必要がある。

では吉里が善吉の別れの言葉をどう受け止めていくのかを詳細に追ってみたい。まず過去に体験した出来事をへいま内面に浮かび上がらせる様子が語られる。経験的事実は回想している〈今現在〉が紡ぐ時間系列上に引き込まれ

る以上、現在時における回想者の解釈により、回想されるへもとの出来事へは侵食を受ける。この内面描写の場合、選り出した過去の出来事を再編成する途上で、過去の自分に同化し、逆に現在時に強く働きかけ、その葛藤が引き金となって吉里の言説が生み出される。

わる止めせずとも東雲の部屋で二上り新内を唄ったのも、今耳に聞いて居る様である。店に送り出した時は恰で夢の様で、其時自分は何と思つて居たのか。あの事もあの事も、あれも此も云ひたかつたのに、何で自分は云ふ事が出来なかつたのか。いえ、云ふ事の出来なかつたのが当然であつた。

この箇所にある「其時」とは吉里が帰りを急ぐ平田を呼び止め、再び二人が部屋の中に入ってしまった五章の時を指す。次の引用はその箇所である。

西宮は平田の腕を取つて、『まア何でも好い。用があるから………。まア、少し落付いて行きさ。』と、再び室の中に押込んで、自分はお梅と共に廊下の欄干に倚れて、中庭を見下して居る。——中略——

中庭を隔てた対向の三ツ目の室には、まだ次の間で酒を飲んで居るのか、障子に男女二個の影法師が映つて、聞取れない程の話しも聞える。『中々冷えるね。』と、西宮は小声に云ひながら後向になり、背を欄干に倚せ変た時、二上り新内を唄ふのが対面の座敷から聞えた。

このように五章で語り手は荒涼とした部屋の外の様子を描写するのみで、部屋の中の二人の様子をいっさい語らない。語り手は部屋の外にいる西宮の位置に立って描写していることがこの引用箇所からわかる。八章で自己の二重化が生じる吉里の内面を描き出し、五章で語らなかつた部屋の中での「其時」を彼女に近い位置から読者に届けていることになる。「二上り新内」を「今」聞いているように知覚し、聴覚や触覚などが次々に刺激され、「其時」の様子が甦る身体の運動が描かれている。その感情の高まりの中で、「其時」の自分に向かって、現在の自分が過去の自分にどう問いかける。「何で自分は云ふ事が出来なかつたのか」。だが、すぐさま「いえ、云ふ事が出来なかつたのが当然であつた」と打ち消す。これは「今」の自分が、「其時」の自分に同化し、交流した結果、打ち消したものである。続いて「自分の姿」を「意気地なさそう」に見る。これは現在時からのやや厳しい自己評価だが、同様に打ち消され、「道理らしく」見えるという弁護の姿勢に一変する。このように、「其時」の自分との交流によって変化する動的な心のありようを語り手は照らし出しているわけである。全言説を振り返ってみても、吉里と「情夫」の平田との二人だけの描写は存在せず、描くこと自体を語り手が避けているという印象さえ受ける。二人だけの様子がかすかに描かれる五章でさえ語り手は部屋の外に立ち、二人の様子について語りの項目から除外する。読者が知らなかつた二人だけの時間〈を別れた後に、回想する吉里の内面世界から浮かび上がらせていたことになる。八章に平田の親兄弟と会うことを空想する箇所がある。そこに「弟も妹も平田から聞いて、居た年頃で」「かねて平田から写真を見せて貰つて」「平田の寝物語に聞いて居た」という語り手による注釈がある。会ったこともない人物を吉里がリアルに想像できる背景を語り手が説明するわけであるが、語り手の表現行為の側からとらえ直せば、平田から聞いたとき、見せてもらつたときという物語世界外にあつた出来事を挿入していることになる。こうしてテキストに取り込まれた物語世界

外の情報は、やはり二人だけの時間を回想する吉里の内的世界から立ち上げていく意図性が確認できるわけである。にもかかわらず、その内面描写にそれまでの言説形成の方針に反する語り手の独断的意見が同居している。

冷遇てく冷遇抜いて居る客が直ぐ前の楼へ登ツても、他の花魁に見立替をされても、冷遇て居れば結局喜ぶべきであるのに、外聞の意地ばかりでなく、真心修羅を焚すのは遊女の常情である。吉里も善吉を冷遇ては居た。併し、憎むべき所のない男である。

このコメントは平田との別れをベースにして別れの言葉と関わった内面世界とは相反し、遊女一般論で吉里の心中を説明する言説である。これでは馴染み客とのよくある別れの情になってしまい、平田を忘れられない女性が、急に遊女の営業に戻っていく展開によって、吉里の内面描写との矛盾をきたす。遊女一般にたやすく還元できない「情夫」との別れが吉里の身を襲ったに違いないのだから、語り手のコメント自体が、いわば自らの言説世界と読者の読みを裏切っていく方向にあると言える。宇佐美毅氏に、男性的な視線の語り手が女性の内面を示すことでテキストに二つの異方向が生じたという見解があるが、^(注15)私は語り手のコメントが吉里の心の運動を裏切っていくところに、語り手の特質を見出したい。語り手は吉里の内面を遊女の一般的傾向から説明しようとするが、一方で過去へ引張られる吉里の内面を忠実に提示しようとする。それならば、その語り手の意図は何か。この戦略性を吉里の遺書を伝える語り手の表現姿勢から探ってみたい。

過去と現在との交流は吉里が平田の手紙を読み返し、写真を見る十章の場面にもある。写真や手紙は空間的である

ため、過ぎ去った出来事を鮮やかに甦らせるメディアであるが、十章に描かれた吉里の姿も身体の奥深くに刻印された過去の出来事を、身体を媒介にして甦らせていたと捉えることができる。ここでの〈身体〉とは、被写体の平田の肖像を見ながら、吉里が過去に聞いた彼の声や臭い、手触りなどの記憶情報を司る精神としての身体である。吉里は過去の出来事を思い起こしていくが、一方でその時間がもう二度と戻ってこないことを決定づけられる。なぜなら写真は媒体として内面の物語を喚起するが、被写体を「睨と見詰めて居る」吉里の視線が捉えた現実には、流れる時間から切断され、何もいわない平田との距離であり断絶感にはかならないからである。語り手はそういう取り戻せない出来事に直面する吉里をきわやかに描き出す。この吉里のむなしい読解行為が「遺書」に写真と平田からの手紙を添える表現空間を生み出す発想の原点になっていると考えられるので、写真と遺書に「心」というキーワードを書き込み、解説を助ける情報をあらかじめ用意した吉里の意図は何かを次に見ていくことにする。

一筆書残し。無拠覚悟を極め申候。不便と御推もじ願上。平田さんに済み不申候。西宮さんにも済み不申候。お前さまにも済みませぬ。されど私事誠の心は写真にて御推もじ被下度暮々もねんじ上げ。平田さんにも西宮さんにも今一度御目に掛りたく、これのみ心残りにおはし候。何方さまへも、お前さまより宜敷伝へ被下度候。取急ぎ何もく申残し。

おまん様

人々

さ
と
か

写真を見ると、平田と吉里のを表と表と合せて、裏には心と云ふ字を大きく書き、捻紙にて十文字に絡げてあった。(波線引用者)

発信者吉里は「遺書」の中に最小限の事柄しか書かず、「覚悟を極め」た内実は一切明かしていないことに気づく。あえて言葉にしないことで、執筆に到るまでの心情を逆に想像させる効果が生じる。写真と手紙は相乗的に過去の記憶を受信側の小方に喚起させるコンテキストである。「誠の心」という抽象的な単語を、遺書・手紙・写真といった手の込んだ文脈上に位置づけ、その表現空間から特別な意味を読み取らせていたと見る事ができよう。受信者小方は、生前吉里が言った「私しや善さんが可愛いんさ」(十一)などの言葉の意味を、遺書を読む行為を通して反転させ、「薄情」だと罵声を浴びせた過去の自分とも対話しながら後悔の念を強めていく。小万の流す涙からそれを読みとることができる。写真も遺書も、記憶に残る断片的な過去の出来事を想起しなければ、それ自体意味をなさないメディアであると同時に、想起したところで取り戻せない現実^{リアリティ}に直面させるメディアであったことは極めて象徴的である。つまり、これこそが吉里が選んだ最適なメッセージ送出の方法だったのであり、そのようにして伝えられた吉里の「心」は、吉里が平田との過去を思いやったのと同様に身体を媒介にしなければ到底、理解できないものとなっているのである。

「遺書」をそのまま引用して発信者と受信者の物語を埋め込む代わりに、遺書の執筆時期はおろか、その行為自体を語らないというのが語り手の表現姿勢である。語り手が表現に向かう吉里の姿を明言しないのは、書くことをめぐる吉里の心情に少しでも遡らせ、読者の想像力を駆り立てるためである。語り手は批評や解説を加えず、多くを語っ

てくれない。これは死の覚悟を語らず、写真と手紙を添付して、受信者の解釈を期待した吉里の姿勢に同調し、その意向を語り手も継ぐ立場を選択しているためである。その結果、テキストを生成する言葉は読者を語り終わった言葉に立ち向かわせる逆流の力を放出し、それとの葛藤を誘う。吉里が発したメッセージによって、小万が生前言った吉里の言葉を反転させたように、読者にも同様の手続きを促す格好になる。吉里・小万に見たような、受信者と発信者の物語を語り出したわけもここにある。

そこで八章の語り手の独断的コメントの存在意義に戻れば、いったん吉里を遊女一般論で捉える立場に読者を立たせ、吉里の遺書や発信受信の物語を読ませたのちに遡って、読者の手で反転させる戦略だったということになる。もちろん読書行為というのは語られた場面に戻るものであるが、吉里の意図と同調し、吉里がやったのと同じように過去へ向かわせる語り手の戦略を見過ごしてはなるまい。語り手は随所に時刻を告げることがを忘れない。逐一盛り込まれていく時刻は前へ前へと突き進む。それは中引け、大引けなどの吉原内の営業・労働の時間であり、工場の労働開始を告げる汽笛であり、上野寛永寺の明け六つの鐘であった。語り手が意図的に盛り込んだ時刻は逆行する作中人物の意識とのダイナミズムを作り出し、この異方向の存在によって読者を遠くへ突き離して行くだけでは決してなく、この順行と逆行のリズムが、もう一度読者をテキストへ向かわせている。その意味で、やはり金銭と時間の論理は文体の次元にまで投影する問題であったのではないかと思う。

*

先にヒロインの形象における二作品の対照的な関係を示しておいたが、文体の上でも次のように言うことができよう。『今戸心中』の吉里を語る言説は、金銭と時間の論理への反抗と敗北を語る言説であった。これに対して、『浅瀬

の波』は金銭と時間の論理を求心的に追い求めて敗北するお勝を語る言説である。逆パターンの男女を描いた小説という位置づけができると思うのだが、語りに照準を合わせても二作品の差異を確認することができ、加えて金銭と時間間の論理について相反する二つのテーゼを作家廣津柳浪が提出していたと見ることができ、ではないだろうか。以上、本稿は時代の状況を手がかりに作品の持つ表現の可能性と文体の把握の一視点を確認し、作品の位置づけについて言及するところまでで筆をおく。

(注1) 原口隆行氏『時刻表でたどる鉄道史』(昭和六十三年一月、JTBキャンブックス)や三宅俊彦氏『時刻表百年のあゆみ』(平成八年四月、成山堂書店)等に指摘がある。

(注2) 伊狩章氏は『日本近代文学大系第47巻明治短篇集』(昭和四十五年五月)の中で、「本作品のころはまだ山陽線は開かれていない。したがって、平田はまず神戸まで鉄道で行き、そのあとは船かなにかで岡山まで行く」(二九二頁・頭注二)と注釈しているが、山陽鉄道は明治二十四年三月十八日の時点ですでに神戸と岡山間が開通している。よって、平田は岡山まで鉄道を利用して考えると考える方が自然なのではないかと思う。

(注3) 時刻が盛り込まれる特徴については、宇佐美毅氏『今戸心中』論——アンビヴァレントなテキストとして——(平成元年五月、「日本近代文学」)に指摘がある。氏はJ・ジュネットの「速度」の概念などを援用し、読み手の読みの位置を詳しく考察する立場から「テキスト構造」を説明しようとしている。時間とテキストの語りについて早く注目した論といえる。

(注4) 榎並重行・三橋俊明両氏『近代の系譜学——空間知覚編』細民窟と博覧会(平成元年二月、JICC出版局)。なお、鉄道あるいはそれに付随する時刻表が人間の知覚に影響を与えたという点で、李孝徳氏『表象空間の近代 明治「日本」のメディア編成』(平成八年二月、新曜社)に、「例えば、鉄道のタイム・スケジュールが設定されれば、物流の基点となる駅を中心とする地域の社会的活動は鉄道のタイム・スケジュールに従うことを余儀なくされ、地域の社会的時間はその固有性を奪われることになる。しかも、各地域の社会的時間は鉄道のタイム・スケジュールに拘束されることで連結し、統一されるのだから、鉄道網によって結びられる地域の時間は均質的なものとなる。」(第8章「交通空間の変容」)という指摘があ

る。

(注5) 例えば、「作の材と其の運用」(明治三十年四、六月『新著月刊』のち『唾玉集』に所収)での「『今戸心中』の出所」および「『浅瀬の波』の由来」があることは周知の通りである。

(注6) 例えば、吉田精一氏「広津柳浪の深刻小説」(『自然主義の研究(上)』昭和三十年十一月、東京堂)に「この、思ふ男に別れて思はぬ男と死ぬといふ主題は、近松その他の心中物にも見出しがたいもので、ここに人間心理の立入った解釈が見られる。」とある。また関礼子氏に「それは心中というよりも一種の同情死というか、いわゆる近世的・近松的な、彼岸で二人が結ばれるということでは全然ない枠組みに置かれている。」(『座談会』に「ごりえ」『たけくらべ』——テキストのへ空白)をめぐって——平成七年六月「解釈と鑑賞」という発言がある。

(注7) 前田愛氏は『都市空間のなかの文学』(昭和五十七年十二月、筑摩書房)の中で、明治二十七年頃までに出現する時計塔に注目し、人々の生活の中に近代の時間の観念が入り込んでいく状況を指摘している(「I 塔の思想」)。「二十四時間制が約束する管理された均質な時間」と、「旧暦に即したゆるやかな生活リズムを温存させていた自然的な時間」という、この二つの異質な時間の流れに切り分けられていた東京の風景は、この場面を理解するのに有効な指摘である。

(注8) 『工場巡覧記』「鐘ヶ淵紡績会社(五)」(明治二十五年二月五日「東京日日新聞」)に、「工業社会の最も勉むべき点は職工の規律を厳格に取締るに在り去れば同社も創立以来種々の方法に依り彼等の出入りの時間を知らんことを求めたれども未だ完全なる仕組を見出す能はず或る時は職工の姓名を記し之れに依りて勤怠の程を知らんことを勉めたれども女工の名は大抵類似のもの多く齷に紛らはしきのみならず時に同姓同名の人もありて混雑を生ぜし事少なからず或は番号のみにて知らんことを期したる事ありしも矢張り煩に堪へずして労働時間を妨ぐるの恐れもありて種々試験し来りたる今日にありては矢張り番号に依り一箇の通帳を製し職工にして工場に入る時之れを掛りの人に渡せば掛りの人は之れを原簿に引合せ置き帰る時に再び之れを渡すといふ事にせり斯くする時は職工の手数も掛らず出入りの時間も明細に知る事を得べしといへり」(傍点引用者)とある。こういった同時代の資料は、時間と金銭とが交錯する中に置かれていく賃金労働者の姿を彷彿とさせる言説といえる。

(注9) 社会学的な見地から独自の時間論を展開している真木悠介氏は、資本が基本的に時間との戦いで利潤を追求していくという近代社会の時間意識の一端を分析している(『時間の比較社会学』第五章「近代社会の時間意識—II」昭和五十六年十一

月、岩波書店)。氏は、「労働者が時間どおりに出勤し時間にしたがって操業するという習慣が形成されるだけのためにも」かなりの時間を要したらしいことなどに触れながら、工場や官庁などが「近代人の〈生活の時計化〉の領域を順次拡大し」ていった状況を述べている。

(注10) 今回参照した給与体系の表を次に掲げておきたい。最初のものは、明治十四年千住製絨所「職工規定」から引用したが、ここでは、岡本幸雄・今津健治両氏『明治前期官営工場沿革——千住製絨所・新町紡績所・愛知紡績所——』（昭和五十八年十一月、東洋文化社）を参考にした。なお、本書は国立公文書館所蔵の稿本を活字復刊した書である。後のものは前掲（注8）『工場巡覧記』の（四）（明治二十五年二月四日「東京日日新聞」）から引用した鐘淵紡績会社のものである。

其一 時間給工ハ製品ノ多寡ト個数ヲ明細ニ分子能ハサル科部ニ従事スルモノトス依テ其技術ノ熟否ヲ審察シ左ノ定給ヲ支給ス

一等技男	日給八拾五錢
二等技男	全 七拾錢
三等技男	全 五拾五錢
四等技男	全 四拾五錢
五等技男	全 四拾錢
技男ニハ十二時間内ハ定日給ノ余ヲ給セスト雖モ十二時間外ハ其給料ヲ十除シタル高二割五分ヲ加ヘ給ス	
一級工男	日給三拾錢
二級工男	全 貳拾五錢
三級工男	全 貳拾錢
四級工男	全 拾七錢
五級工男	全 拾五錢
一級工女	日給貳拾錢
二級工女	全 拾七錢

三級工女 全 拾五銭
 四級工女 全 拾三銭
 五級工女 全 拾銭

其二 準業給工ハ製品ノ多寡個数等各自ノ製作高ヲ以テ定標ニ比準シテ支給スルモノトス然レモ工業ノ都合ニ依リ一旦工
 事甚タ多端ナラズシテ充分ノ作業ナキニ方テハ右ニ記載スル時間給工ノ日給ヲ支給シテ使役スル者トス
 但シ技術ノ熟否ニ随ヒ其準拠スヘキ等級ヲ予テ命シ置モノトス

職工の賃銀は工業会社の最も必要なる点にして特に研究すべき部分なりとす。今同社が受負仕事を命じ、其の出来高に
 依りて賃銀を給する職工の外、通常雇ひ入れたる職工の等級及び給料表は

甲 (首に男工なり)		乙 (以下首に女工なり)		丙	
一等	一 円	一等	五十銭	一等	二十銭
二等	九十五銭	二等	四十八銭	二等	十九銭
三等	九十銭	三等	四十六銭	三等	十八銭
四等	八十五銭	四等	四十四銭	四等	十七銭
五等	八十銭	五等	四十二銭	五等	十六銭
六等	七十五銭	六等	四十銭	六等	十五銭
七等	七十銭	七等	三十八銭	七等	十四銭
八等	六十五銭	八等	三十六銭	八等	十三銭
九等	六十銭	九等	三十四銭	九等	十二銭
十等	五十五銭	十等	三十二銭	十等	十一銭
		十一等	三十銭	十一等	十銭
		十二等	二十八銭	十二等	九銭
		十三等	二十六銭	十三等	八銭

十四等	二十四銭	十四等	七銭
十五等	二十二銭	十五等	六銭

十六等	五銭
十七等	四銭

〔注11〕 岡本幸雄氏『明治期紡績労働関係史——日本的雇用・労働関係形成への接近——』（平成五年十月、九州大学出版会）

〔注12〕 先の〔注8〕と合わせて、職工たちがおかれていた劣悪な労働条件についての言及が明治二十年代半ばあたりから目に付くようになるが、例えばエー、シビルの報告の中にも「十二時間、時として十六七時間の労働は五十以上の者をも用捨なく、十歳にみたぬ者をも慈悲なく役するなり」（『鐘淵紡績会社——無情なる機械力と有情なる人間——明治二十六年四月十二日「国民新聞」）という文言がある。これら当時の報告の言葉は、本稿の文脈に即せば、過酷な労働を強いる工場側の「金銭と時間の論理」追及の姿を照らし出す言説として捉えることができる。

〔注13〕 『近代性の構造 「企て」から「試み」へ』（平成六年二月、講談社選書メチエ）中の「第二章 近代性の根源」に、「商人の行動とは先取りする意識によって先導されている行動であるから、結論として、先取りする意識が後に近代に受け継がれるであろう抽象的で直線的な計算可能な時間を生んだのである。」とある。

〔注14〕 前掲〔注5〕『浅瀬の波』の由来」中に出てくる柳浪自身の言葉。ここでは『新著月刊』の本文に拠る。

〔注15〕 前掲〔注3〕宇佐美氏論文に、「『解釈』すべき女の生き方を、この時——『吉里の内面表現』を指す、引用者注——を除いては『男の視線』によって描き出している語り手の表現姿勢は必然的に作品内における読みの異方向を導き出し、語りの方々は物語内容を裏切ってしまうことになるのである。」とある。

〔付記〕 廣津柳浪作品からの引用本文は『明治文学全集19廣津柳浪集』に拠った。旧字体は適宜、新字体に改め、ルビは必要なものだけに限った。なお、本稿は樋口一葉研究会第十一回例会（平成十年六月六日、於大妻女子大学）での口頭発表がもとになっている。会場で多くの方々に貴重なご意見を賜った。記して感謝申し上げる次第である。